
最期の日

ファンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期の日

【コード】

N9536B

【作者名】

ファンド

【あらすじ】

突然神様から死ぬことを告げられた。その青年の最期の日

どうやら俺は今日死んでしまつらしい。こんなこと他人に言つたら笑われるかもしれないが、昨日の夢の中で神様に言われたから間違いない。枕元には神様からもらった岩のようなよくわからない置物が置いてある。

「冥土の土産」

とかちよつと上手いことを言いながら渡してきやがった。あのヒゲじじい、あつちに行つたら一発殴つてやるうかと思う。こんなもの俺の趣味では無い。間違いなくあのヒゲからもらつたものだ。

「こんなもの家のどこに飾れつて言うんだよ……。」

と思つたがどうせ今日死んでしまうので関係ないのに気がついた。

2

「まあいいか。今日は最期の日だ。最期の日を楽しもう。最期つてことは何も考えなくていいんだからな！プラス思考だ、プラス思考」

「じゃあ行つてきます」

とカバンを手に取り家を出る。朝食は取らない。いつものことだった。

「ああ、ちよつと待ちなさい。今日は朝ごはん、ちゃんと食べていきなさい」

母さんに呼び止められた。珍しいな、朝飯食つてけなんて……。

と思いつつも履いた靴を脱ぎ、食卓へ向かう。

「最近学校はどう？楽しい？」

「んーそこそこ」

と答えながらたくあんを口へ運ぶ。これが最期の朝飯か・・・と思うと少し気が滅入るので考えるのはやめる。

「じゃあ気をつけて行ってらっしゃい」

「ああ、母さんもね」

学校へ行く。周りに気を配りつつゆっくり向かう。

「トラックとかが突っ込んできて死ぬんだとしたら気をつければ死なないかもしれないからな・・・。」

と思いつつ歩いていたら学校へ着いていた。

「自動車事故じゃないのか・・・。」

教室へ入る。

「おはよう、元気かい山下君」

「ああ、おはよう・・・。」

こいつは山下。小学校からの知り合いだが、どうにも神経質なところがある。今日も朝から何かあったのか顔色が悪い。

「元気ないな、どうしたんだ？」

「いや、実はさ・・・頭のおかしいやつだ、何て思わないで聞いてくれよ・・・？」

驚いた。聞くところによると山下も夢の中に神様が降臨して

「明日、お前は死ぬ」

といわれたらしい。

「俺もおんなじような夢を見たんだが・・・じゃ、じゃあお前も冥土の土産貰ったのか？どんなやつだった？」

「いや、俺はそんなもの貰ってないけど・・・」

「え？じゃあ何でそんな話信じてるんだよ。たかが夢だろ？」

「いやー、信じないにしても突然夢の中で死ぬ、とか言われたら怖いじゃん」

「おいおいじゃあお前の場合ただの夢っていう可能性もあ」

ガラガラ。先生が教室に入ってくる。顔面蒼白だ。

「みんな、落ち着いて聞いてくれ。今全国に緊急的な連絡があつた。巨大隕石が地球に迫っているらしい。いや、迫っているというか迫っていた、というのが正しいか」

先生の話 요약するとこうだ。昨年秋ごろ、NASAが地球に巨大な隕石が近づいているのを発見した。しかしこれを発表すると世界中がパニックになる。だから今日まで極秘裏にその隕石を何とかしようとした。でももう駄目だ、ということが確定したので隕石が落下する今日、全世界にこのことを発表した、ということだそうだ。

「ああ、だから今日は母さんが朝ごはんを食べて行くように言ったのか・・・母さんの夢にも・・・」

女子は全員泣いている。男子も相当焦りは隠せないようだ。泣いてるやつも数人いた。先生も相当困惑しているようだ。

さつきから引つかかっていたことがある。

「冥土の土産」

これだ。何で俺には渡して、山下には渡してないのか。あの岩のような・・・というか隕石、そうか、隕石か、あれは。と気づくのが早いか、動き出すのが早いか、というような速度で俺は教室を飛び出した。

「あれを粉碎すればあるいは・・・」

わき腹が痛い。こんなに本気で走ったのはいつぶりだろう。街には誰一人としていない。最期の日をそれぞれの家で楽しんでいるのだろうか。家に着いた。枕元に置物があった。

「冥土の土産・・・か。うおおおおおおおお」

持ち上げ、机の角に向かってフルスイングする。真っ二つに割れた。

「これじゃだめだ、きつと駄目だ。もっと細かく粉碎しないと駄目だ。」

何分たったただろうか。バラバラに粉碎された隕石の置物と刃がボロボロになったミキサーが地面に転がっていた。俺は汗だくだった。息が切れる。

「隕石はとうになつたの・・・か？疲れた・・・な・・・寝よう・・・」

隣の家から歓声が聞こえる。

(後書き)

いささか先生って凄いなと思いましたよ・・・

あとジャンルの分類が間違ってるかもしれないです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9536b/>

最期の日

2010年10月9日00時43分発行